大学生活に関する振り返りと進路適応

○設楽紗英子¹ 桑原千明²

(¹作新学院大学女子短期大学部・²関東短期大学)

キーワード: 自己分析, 大学コミットメント, 自己効力

Is self-exploration task concerning college life meaningful for career adaptation?

Saeko SHITARA¹, Chiaki KUWABARA²

(¹Sakushin Gakuin University Women's College, ²Kanto Junior College)

Key words: self-exploration, university commitment, self-efficacy

【問題】

大学は社会に出るための準備段階であり(渡辺, 2009), 大学生活を通じて得た経験を振り返り, 整理し, 意味づけをしていく行為は, 次の進路選択への適応を高めていくものと考えられる。下村(2000)によれば, 自己に関する理解は自己決定に関連し, 物事への主体的な取り組みにつながる。また, 職業と自己をすり合わせるような自己分析も自己決定に関わりを持ち(安達, 2010), 実際, 実習の経験から自己と保育職の適性を結びつけられる学生は, 保育職を選択することに確信を深め, 自己効力が増すと報告されている(森, 2003)。

専攻と職業の接続は就職への意欲につながる(半沢・坂井, 2005)とされるが, 保育者養成系の短期大学では, とりわけ, 2年間で即戦力となる人材を育成すべく, 大学生活全般を通して社会人として役立つための教育に力を注いでいる。大学生活を通じて, 職業と自己の接続を促す狙いがあると言える。そこで, 本研究では, 自己分析課題への取り組みが, 進路選択への適応に関わる可能性について検討することとする。

【方法】

対象者 保育者養成系短期大学の1年生3クラス(A, B, C) 79名(男子10名, 女子69名, 平均年齢18.5歳)。

調査時期 2012年の7月と2013年の1月の2回, 質問紙調査を実施した。Bクラスのみ, 7月の質問紙調査の後と, 1月の質問紙調査の前に, 大学生活を振り返る自己分析課題に取り組んだ。

調査内容 ①進学動機づけ 栗山ら(2001)の尺度を用いた(25項目, 5件法)。探索的因子分析の結果, 栗山ら(1995)とは若干異なる, 保育者養成課程の特徴を反映した5因子(“社会的地位”, “自己成長”, “無目的漠然”, “上昇志向”, “親要因”)が得られた。

②大学コミットメント 小平(2011)の尺度を用いた(16項目, 5件法)。探索的因子分析の結果, 小平(2011)と同様の4因子(“専門職への志向”, “専門領域への興味”, “大学適応”, “職業への継続性”)が得られた。

③進路選択自己効力 浦上(1995)の尺度を用いた(1因子, 30項目, 5件法)。

【結果と考察】

7月のクラス間の差 クラスごとに学生の特徴が異なる可能性を考慮し, 進学動機づけ, 大学コミットメント, 進路選択自己効力について3クラスの差を検討した。その結果(Table 1), AはCよりも無目的漠然が有意に高く, また, Bよりも専門領域への興味や, Cよりも専門職への志向が有意に低く, Aは専攻に対する意欲の低さが特徴的であった。BとCには有意な差はないことが示されたので, 続く検討にはB, Cを用いることとした。

7月と1月の差 自己分析課題実施の有無と, 進路適応の変化の関連を検討するため, BとCそれぞれの7月と1月の大

学コミットメントと進路選択自己効力の差を検討した。その結果, Bでは, 進路選択自己効力が7月よりも1月の方が有意に高く, Cでは7月よりも1月の専門職への志向が有意に低かった。したがって, 大学生活の振り返りに取り組むことと, 自分の進路選択に対して自信や積極性が増すことは何らかの関連がある可能性が示されたと言える。

しかしながら, BクラスとCクラスも, 若干, クラスの特徴に違いがあるため, 他の要因も考慮していくことや, 大学生活を振り返る課題の実施時期や実施回数などは精査が必要である。そのためには, 今後も継続的に大学生活を振り返る取り組みを実施し, 結果の妥当性を確認していくことが必要である。

Table 1 クラスごとの差【月】

	クラス			F値	多重比較
	A (N = 26)	B (N = 27)	C (N = 26)		
進学動機づけ					
社会的地位	3.25 (.69)	3.19 (.68)	2.87 (.96)	$F(2, 76) = 1.79$	
自己成長志向	3.41 (.77)	3.91 (.60)	3.70 (.90)	$F(2, 76) = 2.82$	
無目的漠然	2.11 (.79)	1.73 (.59)	1.52 (.71)	$F(2, 76) = 4.60^*$	A > C [*]
上昇志向	3.78 (.92)	4.09 (.61)	4.01 (.61)	$F(2, 76) = 1.38$	
親要因	2.65 (1.08)	2.74 (.97)	2.69 (1.18)	$F(2, 76) = .04$	
大学コミットメント					
専門領域への興味	3.36 (.68)	3.94 (.60)	3.55 (.88)	$F(2, 76) = 4.22^*$	B > A [*]
大学適応	3.70 (.75)	4.13 (.64)	3.37 (.85)	$F(2, 76) = 2.19$	
職業の継続性	3.37 (.76)	3.61 (.76)	3.79 (.87)	$F(2, 76) = 1.84$	
専門職への志向	3.54 (.93)	3.91 (.79)	4.18 (.99)	$F(2, 76) = 3.27^*$	C > A [*]
進路選択自己効力	3.00 (.57)	3.15 (.54)	3.46 (.54)	$F(2, 76) = 4.44^*$	C > A [*]

^{*}p < .05

Table 2 7月から1月の進路適応の変化

	Bクラス			Cクラス		
	平均値 標準偏差		t値	平均値 標準偏差		t値
	7月	1月		7月	1月	
大学コミットメント						
専門領域への興味	3.94 (.60)	3.86 (.64)	.76	3.55 (.88)	3.63 (.83)	-.54
大学適応	4.13 (.64)	3.98 (.60)	1.54	3.96 (.85)	3.83 (.87)	1.27
職業の継続性	3.61 (.76)	3.52 (.78)	.56	3.79 (.87)	3.62 (1.11)	.99
専門職への志向	3.91 (.79)	3.81 (.95)	.65	4.18 (.99)	3.79 (1.14)	2.15 [*]
進路選択自己効力	3.15 (.55)	3.46 (.56)	-3.73 ^{**}	3.45 (.55)	3.42 (.47)	.41

^{*}p < .05